

有島武郎研究

—「詩への逸脱」をめぐって (一)—

宮野光男

有島武郎研究—「詩への逸脱」をめぐって(一)—において述べたように、有島の、詩と詩論の解明の過程において、とくにその中に表わされている内面性の通時的変化とその諸相を明らかにするためにとりあげることのできる対象の一つとして、有島のホイットマンへの関心がある。

有島とホイットマンとの関係については、すでに多くの論者によって追求されている。それらは、主として、有島のホイットマン論—「ワルト・ホキットマンの一断面」(大2・6)から、「ホキットマン詩集」第二輯卷末伝記「ワルト・ホキットマン」(大12・2)に至るまで—を中心に展開されるものが多いようである。もち論、有島のホイットマン理解が、我国におけるホイットマン受容史上、すぐれた位置を占めているものであると同時に、ホイットマン像を描き出すことによつて、実は、有島自身の自画像を、そこに描き出ししているのだという意味において、これらの有島のホイットマン論は、有島論のための有力な資料であることはいふまでもないことである。たしかに、有島の、ホイットマンへの発言は、有島の根本的

な思想、人間観、芸術観が、ホイットマンをその一つの契機として△沸騰するに至つた▽、彼自身の個性の噴出なのであり、それは、島崎藤村の示した有島理解、△有島君の書いたホキットマン研究にはそれが単なる評伝とは思はれないほど、君自身の精神の内部に即したことが多く伝へてある。▽以来、伝統的に受け継がれてきた観方の一つなのである。

ところで、有島の、ホイットマンへの関心を知る一つの手がかりとして、彼の著作集にエピグラフとして付されているホイットマン詩をあげることができるのである。周知のように、著作集一六巻のうち、第四輯「叛逆者」(大7・4)と、第一六輯「ドモ又の死」(大12・11)の三巻を除く一四巻には、すべてホイットマン詩がエピグラフとして付されているのであるが、それらの詩篇と、各輯に収録されている作品との内的関係を考察することによつて、有島の、ホイットマンへの期待と、各作品の主題追究と解釈の可能性のための、一つの手がかりを得ることができるのではないかと思われるのである。

有島武郎研究 —「詩への逸脱」をめぐって (一)—

二

エピグラフが、作品にとって、その主題の象徴的な表現であるからには、有島の作家としての全存在が、ホイットマンによって支えられているということにもなる、少くとも、常にその影響下にあるということにもなるが、一方においては、有島自身が、自作の本質を、ホイットマン詩によって最もよく象徴せしめうる可能性を、その中に見ていたということになるのである。

しかし、他方において、エピグラフの効果は、単にそれだけのものではないことも事実なのである。有島がいうように、ホイットマン詩が、 \wedge 象徴派の詩人に見るやうな格調 \vee と \wedge 神秘的表現 \vee 、「ホキットマンに就いて」大9・10」とを持つたものであること^注、大いに預って力あることであるが、エピグラフの可能性にするイメージは、読者に、作者に意識された意図以上の、豊かな解釈の可能性を与えてくれるものなのである。

これまでも、すでに、第八輯、第九輯として上梓された『或る女』〔上・下〕のエピグラフ、「To a Common Prostitute」〔「名もなき淫売婦に」〕が、葉子像のなかに、聖書でいうところの \wedge 姦淫の女 \vee のイメージを見ることができ、さらには、ベタニヤのマリアのもっている poetic woman 性をその理想像としてもっている女性であることなどを、帰納的に推論したことへの、一つの裏づけとして位置づけることができることについて述べたが、このような、作品とエピグラフとの間にみられる密接な関係は、他の輯においても、おそらく成り立つのではないかと思われるのである。

以下、その可能性について、まず第一輯「死」と、そのエピグラ

フとの関係を中心に考察をすすめてみたいと思う。

* * *

著作集第一輯「死」〔大6・10〕には、短篇「お末の死」〔大3・1〕、戯曲「死と其前後」〔大6・5〕、短篇「平凡人の手紙」〔大6・7〕の三篇が収録されているが、この輯のエピグラフは、「To You」である。

Stranger! if you, passing, meet me, and desire to
speak to me, why should you not speak to me?
And why should I not speak to you?

〔ちなみに、有島の訳を掲げておこう。 \wedge 見も知らぬ人よ、あなたが行きなりに、私に遇つて、話しかけようと望むなら、話しかけて悪い訳が何処にあらう、／又私があなたに話しかけて悪い訳が何処にあらう。 \vee 「あなたに」〕

そのタイトルが示しているように、この、著作集第一輯に収録されている三つの作品は、それぞれ素材を人間の死に求めているが、エピグラフを通して理解することのできる有島の意図は、愛による死の克服ということなのである。

有島は、「ホキットマンに就いて」のなかで、ホイットマンの特徴を五項目にまとめて述べているが、その第四番目が \wedge 愛 \vee だというのである。そして、ホイットマンの愛の思想を表わしている一連の詩篇が例示されている中に、「あなたに」がとりあげられ、これ

が、なかでも「私がこの詩集（「草の葉」）の中の金剛石だと思ふ詩」だといふのである。有島は、さらに続けて、

詩は短いけれども心は長いと思ひます。ふと遇つたばかりで友達であり恋人であり得ると感じ合つた人でも、単に見知らぬ人といふばかりに、言葉もかけ合はずに永久に離れて行つてしまふといふのは、はかない、さびしい、腹立たしいことではありませんか。人々が愛の触角をもつと公然と思ふまゝに働かすことが出来たら、私達の生活の相はもつと異なるにちがひないのです。凡てこの秘められたる大事な欲求を、押し隔て、被ひかくし、破壊せんとする生活の様式なり制度なりは、撤廢されなければなりません。而してやがてはされるでせう。

と云つてゐる。

このあとのところで、有島は、先に述べた「名もなき淫売婦に」が、愛の具体的な成就の姿を現わしているものとして位置づけてゐるのであるが、その前提としての「愛」の關係への誘いをうたつた詩が、エピソードとして掲げられてゐるといふことは、「死」に収録されている三篇の作品の共通の素材が「死」であり、それが人間の死の状況——形而上的な意味での死を主題としたものであつても、それを越えるものとしての愛が、本来の主題として主張されているということになるのである。

たしかに、この時期、有島にとつては、死の問題ではなく、死そのものが問題になつてゐたことは事実である。妻安子の死（大5・

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる —

8）と父武の死（ク5・12）が、有島に与えた影響は、有島に一つの転機をもたらすほどのものであつたことは周知のことである。しかし、そのこと自体が一つの証明でもあるが、死が、人間の根源的な、しかも形而上的な問題として、深く有島の精神構造に關つてゐたからこそ、有島は、三篇の作品を通して、死の克服を試みようとしたのである。しかも、興味深いことに、「死」の意味は私にとつて何よりも大きな意味を持つてゐる。其処にはホイットマンが歌つてゐる以上の何物かがある。V（日記、大5・6・25、原文英文）というように、このとき、すでに、ホイットマンの「死」の思想の中に見ていた、肯定的な「死」の思想、つまり、死の讚美思想は、その本質において有島のそれとは異質のものであつたことを知ることができるのである。これは、いわば一種のホイットマン離れともいふべきものであつて、人間観における否定的状況認識としての死として位置づけられてゐるということができるのである。

ところで、有島にとつて、形而上的な意味での死とはいかなる状況であらうか。

たとえば、有島は、

「お末の死」が氣に入つて嬉しかった。花袋があの作を見て災厄といふものゝ不思議な道行が自然に暗示せられて居ると云つてくれたのは嬉しい評の一つだと思つた。僕はあの晩あれを書き続け朝の三時頃に恐ろしい様な淋しさに襲はれてハンケチがずぶ濡れになる程すゝり泣いた。隣に寝てゐる大石に氣取られはしまいかと思つて心配した。それがあの作をあれだけしてくれたのだ

と思つてゐる。「足助素一宛書簡、大3・1・10」

と書き送っているが、ここで、有島をして涕泣せしめているものは人々が愛の触角をもつと公然と思ふまゝに働かず√べきであるにもかかわらず、それが疎外され、結局は、人間が孤独の状況におかれてしまつてゐる現実への共感と同情の思いであろう。花袋のいう△災厄√も、お末をとりまく、素朴な、ある意味では動物的に、好悪の感情をむき出しにしながら生きてゐる、善意の人々が顕わにしている人間関係の深い断絶を暗示していることへの共感として語られてゐるところであろう。それこそ、まさに、有島にとっては、お末の死を越えた、根源的な死の認識だったのである。山田昭夫氏はこのところに、有島の△△同情√の原理△^(註3)を見ておられるが、それは、有島の間諷にみられる、否定的契機、換言すれば、死の認識を前提とする愛の希求を、その内容とするものなのである。

その意味では、「死と其前後」は、妻安子の死を前提にしながらなお、それを作者有島の個人的な体験の叙述の範囲にとどめず、素材としての妻の死を、より普遍的な、形而上的な死として形象化しそれに対する愛の勝利を暗示しようとしたものであるといふことができよう。それは、吹田順助宛の書簡「大6・5・20」、△死は平等に無容捨に人に逼る。其力強い圧力に抵抗し得る何物もない。人は到底夫れに絶対の服従をする外はない。服従をしないでも結果はさうなつてしまふ。然し茲に人の心の中に愛と云ふものがあり、而して其擬集は人間をして不滅―死に對してさへ―であると言ふ幻想を持たしめる。「中略」愛し得、愛され得たとの確然たる自覚に達

したものは何処か死に對して対等の立場をとり得る、夫れを暗示したかつたのです。√に、明確に語られてゐるのである。このことは△絶対的な死の前に無力な人間が、愛の力によってそれを超越しようとする本能的努力を描いた作√という藤木宏幸氏の指摘にも見られるように、明らかに、エピグラフ「あなたに」の解釈に見られる愛の理想像の実現が、すでに、このところに意図されていることを知ることができるのである。

有島が、愛の作家であるということは、すでに定説化してゐることである。そして、著作集第一輯「死」のエピグラフは、まさに、その愛を、死という具体的な、根源的な否定的状況を通して表わされてゐる、交わりの欠如―関係の断絶―からくる孤独の悲哀と不安を解消する唯一の可能性として、既成の概念としてではなく、新たに求むべき△新しい衣裳√ともいふべき関係概念としての成就を願つてなされた祈りでもあるといふことができるのである。そのことは、また、このエピグラフが、第一輯のそれであると同時に、有島の、全著作集のためのエピグラフでもあるといふことを表わしてゐるのではないだろうか。

三

有島の、否定的な自己認識としての死を、あるいは、それを克服するものとしての愛を、より具体的な、一種のイメージとして彷彿させる手がかりを、ホイットマン詩「あなたに」は与えてくれるのである。このことは、有島の、この期における意識としては、まだ充分に認識の域にまで達していない、いわば影の部分にあたるもの

であるかもしれないが、有島における可能性として、とくに、この詩が、全著作集のエピグラフでもある、という意味では、むしろ積極的に考察してみたいと思う問題なのである。

* * *

まず第一に、△あなた▽が“Stranger”を意味しているということから浮んでくるのは、△故郷喪失者▽というイメージなのである。

聖書の発想からするならば、“Stranger”△見も知らぬ人▽とは異邦人のことである。とくに旧約の発想である神の民イスラエル人以外の民すべてが異邦人であるとする人間観は、カミユを引きあいに出すまでもなく、精神の抛り処、存在の根拠を持たぬ現代人の象徴として一般化しているのであるが、それはまた、△故郷喪失者▽の謂でもある。

もち論、△伝統と肉の衣を脱し去▽〔日記、明39・9・1、原文英文〕ることを、生の目的とした有島にとって、△故郷▽は、一面において脱出すべき旧き処であったにちがいない。その一つの顕現が、教会退会であることは、いうまでもないことである。その意味では、このエピグラフからイメージされる△故郷喪失者▽は、元来積極的故郷脱出者のはずである。有島のホイットマンを称してローラーという人間観もその一つの顕われであろう。しかし、他に安住の地を、いわば第三の故郷を見出すことができなかつた場合、彼にとって、故郷は永遠に故郷であり続けることになるのである。その時彼は、望郷の念にかられる異邦人として、自らの魂の顔の場であ

る新しきカナンの地を求めて、放浪しつづけなければならぬ存在となつてしまふのである。

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動乱はそこから芽生えはじめた。その動乱の中を私はそろ／＼と自分の方へと帰つて行つた。目指す故郷はいつの間にか遙に距つてしまひ、而して私は屢々睚いたけれどもそれでも動乱に動乱を重ねながらそろ／＼故郷の方へと帰つて行つた。〔「惜みなく愛は奪ふ」大9・6〕

ここに求められている故郷とは、有島にとっては第三の故郷であることはいうまでもないことである。そして、有島にとっては、それが、△個性▽という言葉で表わされる△自己自身▽の、魂の内奥にある秘所であつたこともまた明らかなことなのである。

ところで、このところで可能になる愛の世界が、△奪ふ愛▽という言葉で表わされていることに注目してみたいと思う。なぜならば自己の限界状況認識としての故郷喪失状況の回復が、自らの可能性のなかでの回復を意味する△奪ふ愛▽論理でなされているということとは、愛という言葉によつて表わされているという意味で関係回復願望であるとはいつても、エピグラフの詩にうたわれているそれとはその方向性において異つていようと思われるからである。

有島は、ホイットマンが、△見も知らぬ人▽を、△私が求めてゐた彼であり、求めてゐた彼女であるのに違ひない▽〔「見も知らぬ人」〕と、期待をこめてうたつて知っていることを知っているのであ

る。かつて、△私は確かにどこかであなたと欲びの生を生きた▽、その彼と、彼女と、再び交わりを回復することを、△私は待つてゐなければならぬ――私は屹度又あなたに遇ふことを疑はない／だからあなたを見失つてしまはないやうに、私は気をつけ▽なければならぬといふのである。したがって、有島が、△見も知らぬ人▽、つまり故郷喪失者である△あなた▽に、△あなたが行きずりに、私に遇つて話しかけようと思むなら、話しかけて悪い訳が何処にあらう、又私があるに話しかけて悪い訳が何処にあらう。▽と、新しい人間関係を求めて呼びかけるということは、関係の成立そのものが、故郷喪失者をして、新しい故郷を得させる――換言すれば積極的故郷脱出者たらしめる、基本的条件であることを表わしているのである。

ところで、関係の回復を可能にする愛、それは愛であるかぎり関係概念であることはいうまでもないことであるが、エピグラフの詩の解釈を通して明らかになつた関係回復であるという意味で、△奪ふ愛▽とは、その本質において微妙な差があるように思われるのである。

あるいは、それは、有島の愛の論理の二面性を表わしているのかもわからない。「惜みなく愛は奪ふ」もまた、ホイットマン詩そのエピグラフとしてもっている、つまり、ホイットマンの愛の思想の影響下にあるものなのである。しかし、それが、△奪ふ愛▽という言葉で表現されたとき、少くとも、ホイットマンの愛の思想――惜しみなく、お前は私に与へた、それ故私も亦お前に愛を与へる。

／お言葉にあまるこの熱狂した愛を！▽「自己」を歌ふ、「ホヰットマン詩集」第三輯、大12・2」――に触発された、いわば△与へ

る愛▽とは、一種の対立概念として、有島の精神構造を形成しているのではないかと思われるのである。

関係の成立、あるいは回復を、愛に求めた世界、それは「或る女」の世界でもある。葉子が故郷喪失感と、本質的に等質である△楽園喪失感▽をいだいていた存在であることは、すでに述べたところであるが、葉子が求めていたものが、その本質において poetic woman 性であつたという意味で、少くとも△奪ふ愛▽という言葉では表わすことのできないもう一つの愛を求めていたのではないかと思われるのである。もち論、葉子の求めていた愛の関係を、この、いわば△与へる愛▽といふことのできるものだけで満たしようというのは誤りであるが、エピグラフの解釈を作品の主題考察に及ぼして考へた場合の一つの可能性として、とりあげることができるのでないかと思われるのである。

内村鑑三は、有島の教会退会後の生き方を、△楽園を離れしアダムが他の方面における楽園回復の努力▽であつたと云っているが、有島の、故郷回復をめざす愛獲得の歩みは、まことに困難な道行きだつたといふことができるのである。そのことは、第二輯以下のエピグラフの考察によつて明らかにすべきことであるが、それは後考にゆづり、もうすこし、有島の求めた愛の姿を、詩の世界を通して瞥見してみたいと思ふ。

* * *

△魂の象徴▽としての△詩▽への△逸脱▽を決意した有島が、なぜ、△私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかしい

程の廻り道をしなければならぬ。「惜みなく愛は奪ふ」なかつたのか、なぜ、詩の世界に△長い間この憬がれを持つてゐた△「詩への逸脱」にもかかわらず、なお、詩の世界に踏み込むことができなかつたのかといへば、それは、△愛の要求に対する私の感受性が不十分△「惜みなく愛は奪ふ」だつたからだというのである。この、△もつと鋭敏な感受性があつたなら△「△」という思いは、かつて、ベタニヤのマリアが、△鋭敏なる感情と基督を敬慕する affection とは、よく基督が自ら知り給ひし如く基督の死を予察△「日記、明 34・11・24」する者であつたがゆえに、poetic woman として、理想的女性に思ひなされていたことを想起せしめるところであるが、つまり、有島のいう、詩を可能にする能力とはたんに形を生み出すだけのものではなく、愛を可能にする生き方、すなわち、△詩人は必ず深い愛の体験者でなければならぬ△「惜みなく愛は奪ふ」という根本的な条件を満たすことが求められているのである。

ところで、この時期に、愛の純粋なる表現を可能にした者として有島が高く評価した詩人は、中川一政である。

有島と中川との交渉については、紅野敏郎氏の紹介にあるように大正一〇年四月、「我等」に掲載された「雑信一束」のなかの第十一信、中川宛の書信のかたちでなされた、詩集「見なれざる人」評によって知ることができるし、具体的な経緯については、同書の△改版序△に明らかにされているが、「見なれざる人」評は△さりげないかたちで、信念を誠実に語つた△有島の面目を充分うかがうことができる△すべからざる評論の一つなのである。

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる (二) —

有島は、中川の、△「愛」という言葉をかんだかく叫んだり、説いたりせずして、おのずから、「愛」の流露感にうたれる幾多の詩△のなかに、有島の求めた愛の、詩の世界における一つの可能性を見出すことができたのであろう。△一つの虚偽もない△悪びれない独自の感情の深さ△、換言すれば、鋭敏な感受性によって、人間の心の深淵にある真実の思いに触れ、△涙ぐんでから△「涙ぐまじきかな」と書く△ことのできる、愛の可能性を△教へられずにはゐられない△「雑信一束」第十一信」有島だつたのである。

△とう／＼一冊の小さな集となつて、あなたの詩が私の手許にとどいた時、私はあなたに初めて遇ふやうな、よく知つてゐて、少しも知らないあなたに初めて遇ふやうな、はにかみに近い心を以てそれを開き読みました。△に始まる読後感、それ自体、一種の詩論である。とくに、△言葉といふものは本当に不思議なものです。あれは死んだもののやうだが生きてゐますね。言葉には意志がありませんね。△まゝに逆用しようと企てる人には言葉はどこまでも不従順だが、言葉をその内在的な力に於て受け取り、それを素直に用ひようとする人に対しては、実に抜け目のない、自動的な、忠実な友達となつてくれますね。△というところに、「惜みなく愛は奪ふ」において賞揚されている、人間としては最高の、△言葉をその純粋な形に立ち帰らせ△えた詩人としての位置づけがなされているのであるが、このところに、有島の、中川を通してなされた、愛の純粋なる表現を可能にする存在、すなわち詩人への期待の表明を見ることができるのである。それは、「詩への逸脱」論の先験的存在認識ということにもなる。さらに、中川のうたい出している愛△有島

の心意かかっている愛が、たとえば、△三郎（犬）よよくふとりたりな／たま／逢ふよろこびは／尾がちぎれるぞよ△三郎といふびつこの犬と僕」）、△あはれ父はゆくよ／外套一枚にて／寒くはなきかと／われ心が／りに云へば／さむくなし／この絹ばりを借りてゆくぞと／わが傘を手にもてゆけり△「父の出發」）、△いとをしめぬが児を／おのがじし／わが児を負へる／ちまたの母は涙ぐまじきかな△「貧しき母」）のように、可憐さ、思いやり、愛しみ、という言葉で言い表わすことができるような、有島の評語をもつてすれば、まさに△涙ぐましい△生きざまに關わりがあるものだということができよう。有島の、中川の詩への傾倒は、このような調和志向、テンダー・マインド的資質への共感を前提としたものであり、詩と詩論を通して見ることで有島の側面ということもできるのである。

四

△あなた△が“Stringer”を意味しているということから可能になるもう一つのイメージは、ホイットマンのいう、△あなたと共に食ひ、共に眠る、△屹度又あなたに遇ふことを疑はない△△慕はし△い人（「見も知らぬ人に」）への期待の顕現化した存在であろう。それは、△運命のやうな女△「平凡人の手紙」なのである。

△突然運命のやうな女が現れて来さへしなれば……恋愛關係を作る心持はまだ起つて来ない。△「△」とは、非常に具体的な、有島への再婚後遺に對する謝絶の弁ともとれる表現であるが、これはすこし意地悪な見方をすれば、△運命のやうな女△の出現しだいで

は、容易に遷えされる論理であるし、もつと形而上的に捉えれば、△マリオ・プラーズがロマンティズムの最大公約的な象徴であり一種のオブセッションとして指摘した女性像、美しく官能的であるが相手を破壊しつくすとも限らない「宿命の女 Fenne Fata」△への憧憬を、このなかにみることもできるところなのである。

「或る女」の葉子の△妖婦△性の中に△ファンム・ファタル△を見たのは篠田一士氏であるが、有島の描き出した女性像のなかにはたしかに△ファンム・ファタル△的存在を見出すことができる。たとえば、「宣言」のY子、「石にひしがれた雑草」のM子、「或る女」の愛子、さらには、「聖餐」のマグダラのマリヤ、「星座」のおぬいさんなど、つまり、有島の作品において魅力的な存在として描かれている女性像は、何らかの意味で、世紀末芸術において美の象徴、一種の魅力的な妖婦性を持ち、一度彼女と関わりを持つ者を、心乱し、やがて破滅へと導びきゆく存在として位置づけられている、△ファンム・ファタル△的存在なのである。なかでも、有島にとつて、葉子が、嫌悪しつつも心意かれる存在として描かれていることについてはすでに述べたところであるが、この思いは、有島の、△B-Bを愛したものは断末魔の叫びと、珍らしく大きな一顆の金剛石とをBに残して、生死の程も覚束ない時間と空間との彼方へ消え失せ△「心に泌みる人々」大11・7」る者への関心、あるいは、トルストイの「暗の力」におけるニキタを語る部分、△女の奥底の最も恐しい性質——眞の無智が上つ面の皮一重の智力と混合してゐて、慰樂を得、男を手玉にとりたいと言ふ最も卑しい野心に煽られ動いてゐる△、しかも△不思議な魅力で、何をおいてもひた

向きに突き進√まんとする△欲望√をもった存在だとする女性観（日記、明41・6・2）のなかに、その傾向の顕われを見ることができると思われるのである。

有島の、この世紀末的女性像△ファンム・ファタル√への傾倒の可能性は、たしかに有りうることである。後期印象派への関心、ラファエル前派、なかんずくD・G・ロゼッティへの傾倒、オスカ・ワイルド、アンリ・ベルグリンとの関係などが、その可能性を示唆しているのである。とくに、日本の世紀末芸術家の一人である村山槐多に対する傾倒ぶりは、その好例ともいべきものである。

村山槐多が、男性の葉子的存在であると看破したのは紅野氏であるが、その意味からも、出会うべき△運命のやうな女√の内実を理解する有力な手がかりの一つとして、村山槐多への発言をとりあげることができるのである。

* * *

草野心平氏の指摘^(註15)によると、有島は、槐多の「カンナと少女」〔水彩・紙・大4〕の、当時の所蔵者だったということであるが、この絵は、第二回日本美術院展覧会〔大5・10・11〜31〕に出品し、院賞を得た作品である、その構図は、△画面の下部中程の椅子に、いかにも大正時代の少女が、右向きに腰かけている。少女のプロファイルの右側には数本のカンナがあり、その一つは赤い花を開いている。ところで少女の丸い顔は長い髪の毛に包まれてカンナの花よりも赤い。まるで酒顔童女である。そのつぶらな掌も帯も赤い。〔

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる —

中略〕画面全体が赤のトーンの中に、酒顔童女はいくらか微笑気味にいる√というものであった。おそらく、有島は、この「カンナと少女」のなかに、有島の槐多に対する関心のすべてを、つまり世紀末芸術の特色である、生の神秘の表現である△長い髪の毛√、焰の象徴である△赤いカンナの花√や、△赤のトーン√それに、なによりも最も有島の関心をひいたはずの、いわゆる△ガール・ウーマン√である△少女√そのものを、見出していたのである。

有島が槐多の詩の中で、とくにすぐれたものとして、「槐多の歌へる」〔大9・8〕の中に引いている詩の一つに、「一本のガラン」がある。

ためらふな、恥ぢるな／まつすぐにゆけ、／汝のガランスのチュ
ーブをとつて／汝のパレットに真直につき出し／まつすぐにしほ
れ／そのガランスを真直に塗れ／生のに活々と塗れ／一本のガ
ランスをつくせよ／空もガランスに塗れ／木もガランスに描け／
草もガランスにかけ／□□をもガランスにて描き奉れ／神をもガ
ランスにて描き奉れ／ためらふな、恥ぢるな／まつすぐにゆけ／
汝の貧乏を／一本のガランスにて塗りかくせ

有島は、この詩のなかに、△自らの生活を血液主義といった位、強健精剛な肉と熱烈純清な魂との讚美者√〔「槐多の歌へる」〕槐多を見ているのであるが、もち論それは、一枚岩的理想状況としてのそれではなかったことは当然である。△凡てを焼き尽くしてもなほ悔いなきまでに、自己を延ばし延ばした槐多√が、その短い生涯

の晩年において、△「一切は墓場の上の幻だ／私のやる事は／私の生は／みんなそれだ／私は何も怖くない／私はその底それ自身／虚無だ」▽「雨ふり」と歌わざるをえなかつた槐多であつたことをも、あわせて知っていたのである。だから、△恐らく彼に健康が続いてゐたら、又彼は大きな次の顛倒を苦しく味はねばならなかつたかも知れない。▽「槐多の歌へる」という予測をしているのである。おそらく、このところに、△激甚なる生命週及▽を見、△アニマリズムの精神▽を見ると同時に、△おれのつなわたりも終りにちかづいた／つなは断れさうだ▽「わが命」と、自らの死を意識しはじめた槐多の、内面の△矛盾撞着と内的葛藤▽をも見逃がさぬ有島の眼を觸れることができるのである。それは、紅野氏の指摘にあるように、△対象の別なく、しやにむに猪突していく狂熱的なエネルギーの集中となりあわせにあるところの異様な空虚感▽と、有島自身の、△槐多と、折りかさなつたように思つていゝ▽姿とを重ねあわせることのできる、生の不安の認識でもあろう。△世界は赤だ、青でも黄でもない▽「わが命」という槐多の世界観は、漱石が「それから」の終末において示し、有島が、葉子の無意識と意識との罅において幻視した、木村の△赤い衣物▽によつて象徴した、生の不安と、本質において響きあうものなのである。この、否定的人間観をふまえた調和のなかに、有島の槐多に託して語る根源的な願望を見出すことができよう。それは、△荒蕩なディオニソスの欲念を四肢とし、楽園の消息に純粹に精通した嬰兒のトルソとを持つた一個のセンチタウル▽「槐多の歌へる」といふ槐多像として描き出されている、聖性と魔性を同時に存在せし

めうるものへの憧憬なのである。

五

著作集第一集「死」のエピグラフ、「あなたに」を、有島自身の解釈を中心にして、さらには二人の詩人との関連において説明してきたのであるが、それによつて明らかになつたことは、有島が愛を追究した作家であつたという、まことに平凡な事実である。そしてその愛の中に二面性を見ることができのではないかという推論が今後の有島武郎研究、なかならず、著作集に付されたエピグラフの解釈の課題として確認されたことが、一応の結論なのである。

たしかに、△「槐多の歌へる」とあなたの「見なれざる人」との間には何んといふコントラストがあるでせう。▽「雑信一束」第十一信」といふ有島の感想は、そつくりそのまま、有島の精神構造の二面性を言い表わしているように思われるのであるが、それは、有島の意図した、第三の故郷において、愛の成就を可能にする存在である△運命のやうな女▽が△センチタウル▽であるという、存在の内面性の特色を表わしているのであり、その延長線上に葉子をおいて考えることができるという意味で、葉子像説明の、一つの視点ともなるものなのである。

著作集第二輯以下に付されたエピグラフの解釈とその位置づけがこれまで試みてきた有島研究、とくに「或る女」研究と、どのあたりで接点を持ちうるか—たとえば「カインの末裔」〔大7・2〕のエピグラフ、「O you slumped persons!...」〔Entans D'Adam〕に表わされている△世の嫌われ者たち▽への共感と同情、「惜みな

く愛は奪ふ』〔大9・6〕のエピグラフ、“Sometimes with one I love”や、“I exist as I am”の解釈の問題など、むしろ後に残された問題の方が多いのであるが、△自分が自分の尺度を探し出すまで永い眼で見てゐてくれ給へ。▽〔平凡人の手紙〕という有島の状況にたち戻ったところで、この考察を一応終えたいと思う。

註15・18 「村山槐多」 昭51・5 日動出版部刊
 註16 高階秀爾 「世紀末芸術」 昭38・5 紀伊国屋書店刊
 註17・19 岡田隆彦 「表現の土着化」 その一〔註11に同じ〕

付記 註2・5・13の各論は、拙著『有島武郎の文学』（昭49・6 桜楓社刊）所収論文である。

註1 「有島武郎君のこと」 大13・3、「早稲田文学」〔「藤村全集」第九巻 昭42・7 筑摩書房刊所収〕

註2・5 「或る女」論 四 ―キリスト教との関連について―

註3 「お末の死」〔「有島武郎・姿勢と軌跡」 昭48・9 右文書院刊〕

註4 「有島武郎の戯曲」〔「有島武郎研究」 昭47・11 右文書院刊〕

註6 「背教者としての有島武郎氏」 大12・7 「万朝報」

註7・9・10・14・20・21・22 「有島武郎―槐多の歌へる―と『見なれざる人』への発言― 昭35・8 「国文学」

註8 昭和六年五月、やばんな書房刊 〔「中川一政文集」第一巻、昭50・5 中央公論刊所収〕

註11 岡田隆彦「日本の世紀末」〔「日本の世紀末」 昭51・2 小沢書店刊〕

註12 「もう一人の『或る女』」〔「日本の近代小説」 昭43・4 集英社刊〕

註13 「或る女」論 一 ―田鶴子と△poetic woman△―

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐる―